水野の自然

Nature of MIZUNO

“めずらしい”樹・植物を探す・見る

水野まつり30周年記念特別版

2019
MAY
5

水野まつり特別実行委員会

はしかに効いた?　まじないが書ける葉

天然記念物はハイブリッド!

瀬戸市唯一のカキの品種。最後の1本。

水野の秘境で夏には休眠する美花。

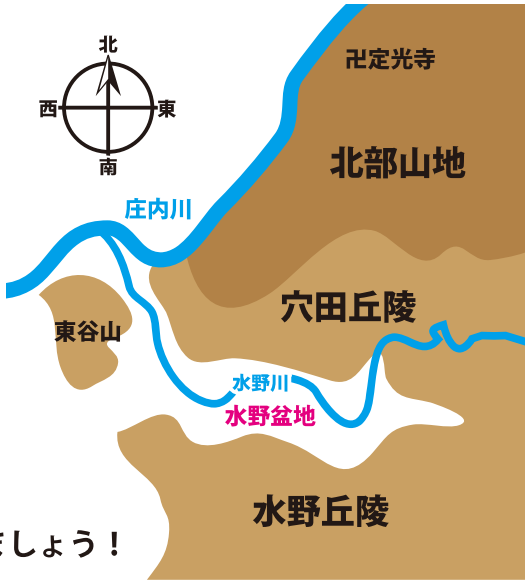
水野地域散策マップ付き

著者
上杉　毅
松本博司

監修
中野克己

水野のみどころ

水野の地形は、東西に細長い地形の水野盆地が続き、その周りをみどり豊かな森林が取り囲み、愛岐県境の山岳地帯から湧き出た渓流が地域の土壌を潤しています。東から西へ流れる水野川の北側から庄内川や定光寺・応夢山へと続く標高 200 ～ 250m前後の森林地帯を「北部山地」、北から東へ回り込むように広がる標高 100 ～ 200m前後のなだらか丘陵地帯を「穴田丘陵」、水南連区や西陵連区を含む南側一帯の丘陵地帯を「水野丘陵」と称します。西端は東谷山（標高 198m）で名古屋市に接し、これらの山丘に囲まれて、水野川の両側に細長く広がる沖積層の平坦地が「水野盆地」です。水野盆地の上流域や下流域ではみどり豊かな森林が広がり、自然環境に恵まれて、水野には豊かな植生が維持されています。



また、水野は幕末まで、代官所や御林方役所といった地方行政の要所があったので、その名残りの歴史遺産も随所に見られます。

みなさんの近くにある樹木や草花などの自然植生や、自然や歴史が織りなす景観を、もう一度見直してみませんか、新たな見識が生まれるかもしれません。

さあ、この冊子を片手に自然と歴史に囲まれた水野を散策しましょう！

～　もし、この水野地域に人が住み着いていなかったら？　～

地域の植生はその地域の気候によって大きく制約を受けるため、気候区部から判断することができます。水野は暖温帯に属するため、人が干渉しなければツブラジイを中心とする常緑広葉樹の森が成立していたと思われます。そのような森は水北町の八幡神社、曽野の八王子神社、下水野の八幡神社、尾張戸神社、自然休養林の一部に今でも残っています。

目次

I.　上水野編 …… 1
II.　中水野編 …… 5
III.　下水野編 …… 9
IV.　曽野・余床編 …… 12
V.　鹿乗・川平編 …… 15
VI.　東谷山編 …… 17
VII. 定光寺自然休養林編 …… 19
水野地域散策マップ …… 22

I. 上水野編

上水野地区の歴史・文化

水野川北岸の水北町には、江戸時代初期に尾張藩主の行殿として「水野御殿」が造営され、その後へ御林方役所が設置されるなど郷畑や北脇がこの地方の政治・文化の中心地となっていました。

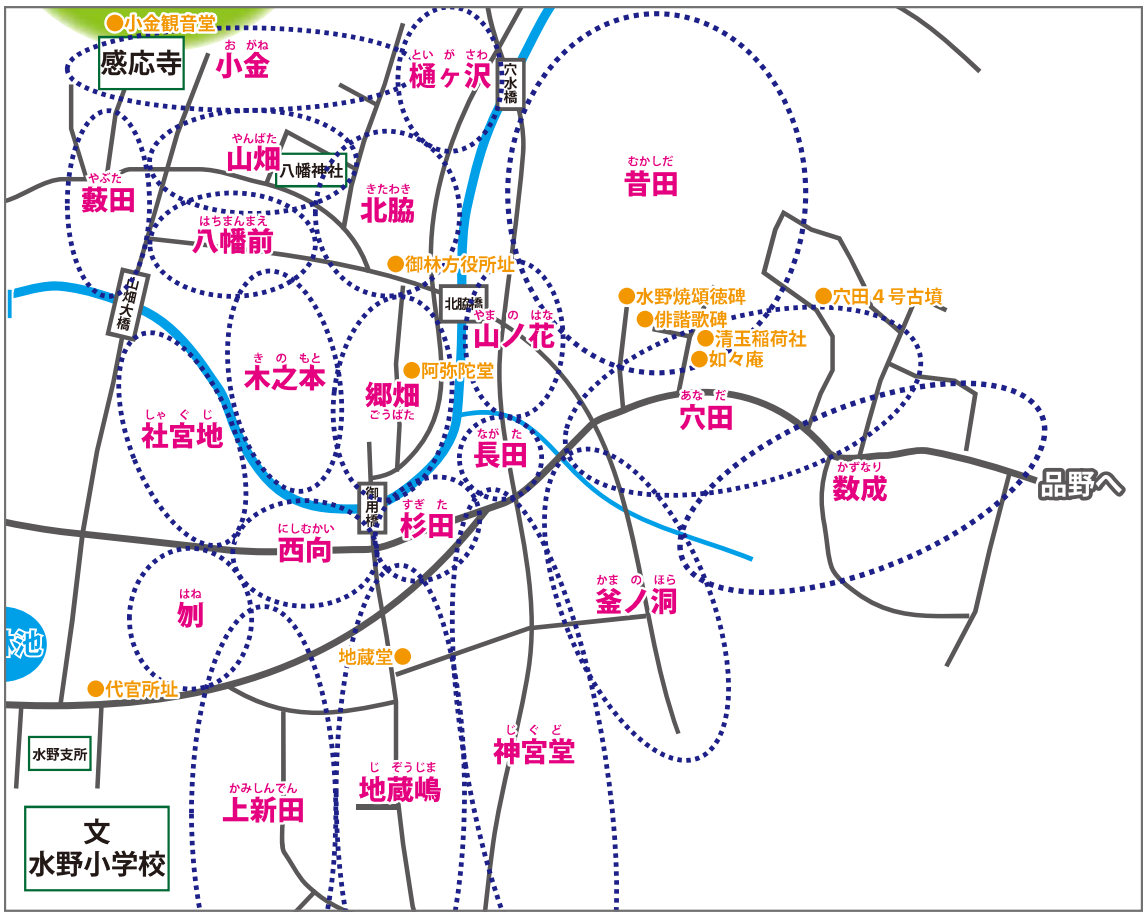
小金山麓の「感応寺」は行基菩薩の創建と伝えられ、瀬戸市でも代表的な禅宗（臨済宗）の古刹です。

感応寺霊園の頂上に「小金観音堂」が建てられ、その北裏に御林方奉行を世襲で勤めた「水野権平家の墓苑」が置かれています。山畑の東隅にある八幡神社の創建年代は判明しないが、二代尾張藩主 光友公が藩費を投入して社殿を修復したと伝わっています。

北脇（郷畑）の「阿弥陀堂」には、明治維新の廃仏毀釈運動の破壊から免れた貴重な歴史遺産の木造阿弥陀如来坐像が安置されています。

江戸中期には水野川南岸の中水野村御鳥林に代官所が設けられ、代官所から東へ延びる道筋の上新田や地蔵島が町場（繁華街）となり、町場のはずれに「地蔵堂」が建てられました。

穴田町の昔田や釜ノ洞から数多くの古墳や古窯が発見され、現地に「穴田４号古墳」が展示されています。昔田にある「如々庵」は如来教の尼寺で現在は住職がいません。「清玉稲荷社」は如々庵の北側の坂上にあり、そこから西へ進むと 「馬酔木吟社同人の俳諧歌碑」が２基建てられており、さらに進むと水野の窯業復活を記念する「水野焼頌徳碑」があります。



① タラヨウ

モチノキ科

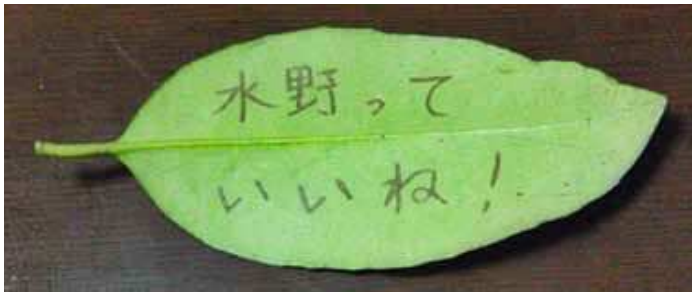
はしかに効いた？　まじないが書ける葉

上本町（旧代官所の近隣）

タラヨウはモチノキと同じ科に属する樹木です。水野では代官屋敷東筋の北側にも植えられていたようで、三社大明神から 600m ほど南東の竹林に数本のタラヨウがあります。中水野編（P.6）で取り上げるマルバタラヨウの片親は、この群落のなかにいたのではないかとの見方があります。

江戸時代に流行した病気でもっとも恐れられていたのは麻疹（はしか）と天然痘で、とくに麻疹は感染力の強い病で、死亡率も高いため、人々は神仏やまじないを頼りにしました。麻疹が流行すると、浮世絵の技法を発展させた錦絵で「はしか絵」が印刷されて流布しました。そのなかに描かれているのがタラヨウの葉です。タラヨウの葉の裏面は、硬いもので押せば色が変わるため、筆がなくても文字が書けます。その特徴を利用して葉裏にはしか除けのまじないなどが書かれていました。タラヨウが各地に植えられた目的の一つにそのような麻疹予防があったかもしれません。

タラヨウ（マルバタラヨウの片親か）



② エノキ

アサ科

一本だけぽつんと・・・
誰が植えたんだろう？

上本町（水野川左岸堤防）

　エノキは従来ニレ科に属するものとされていました。しかしDNA による分類が進んだ結果、現在ではアサ科に分類されています。

　エノキは瀬戸市内の自然林ではほとんど見られない樹木です。切り株から萌芽（ほうが）するコナラやアベマキと異なって、伐採されるとひこばえを出すことなく枯死することが多いためです。

　この木の幹囲は 286cm。

　植えたのは誰でしょうか。

水野川左岸のエノキ

③ ツブラジイ

ブナ科

どんぐりがおいしい。
水野の森の王者の風格！

ツブラジイの大木

水北町（八幡神社境内）

　ツブラジイはブナ科に属し、いわゆるドングリをつけます。よく似たスダジイが海岸付近にあって大きなドングリをつけるのに対して、小さな 1 センチほどのドングリをつけるのでツブラジイと呼ばれます。そのドングリはえぐみがなく生のままでも食べることができます。水北町の八幡神社にはツブラジイの森が成立しています。大切にしたいものです。

ツブラジイのどんぐり

④ ムクノキ

アサ科

樹齢600年？ 水野の歴史にかかわる樹齢問題。

水北町（阿弥陀堂横）

「あいちの名木」に紹介された、瀬戸を代表する巨木です。

ムクノキはエノキと同様に商家に植えられることが多く、瀬戸市内の大木はほぼすべて人が植えたものです。窯垣の小道や鹿乗地区など商業や交易の拠点に大木があるのはそのためです。このムクノキは幹囲 413cm で樹齢 600 年ともされますが、瀬戸市内では集落の中に植えられることが多いので、この場所が上水野村の郷 (中心地) として発展していた頃に植えられたものと考えることができます。水野の歴史を物語っている貴重な木です。大切に保存して後世に残したいものです。

上水野北脇のムクノキ

⑤ コナラ

ブナ科

よくぞ生き残った！強運の一本。

上水野町東のコナラ

上水野町（加藤錦三氏宅裏）

コナラはブナ科の樹木で、瀬戸市内に自然分布する樹木としてはもっとも数が多いと思われます。春に黄色い房の雄花をさげて、秋にはドングリを落とします。10 年ほど前からカシノナガキクイムシによる害を受けて大木がほとんど枯死しましたが、水野では二か所に大木が残っています。そのうちの一本が上水野町東の陶芸家宅のそばにあります。幹囲は 261cm。

⑥ アベマキ

ブナ科

実は瀬戸市一位、アベマキの雄姿。

穴田町（故加藤英一宅北）

アベマキはブナ科に属し、コナラについで瀬戸市内で極めて多くみられる樹木です。葉はクリやクヌギの葉とよく似ていますが、葉の裏は毛が密生しているため白く、簡単に見分けることができます。この木は穴田の民家の裏に自生しています。地上 3m 以上まで二本の木が合体した樹形で幹囲が 382cm です。2008 年から瀬戸市内にナラ枯れが蔓延し、アベマキにも多々被害がありましたが、この木は被害に遭わないように薬を散布するなど住民が大切に守ってきました。

穴田のアベマキ

II. 中水野編

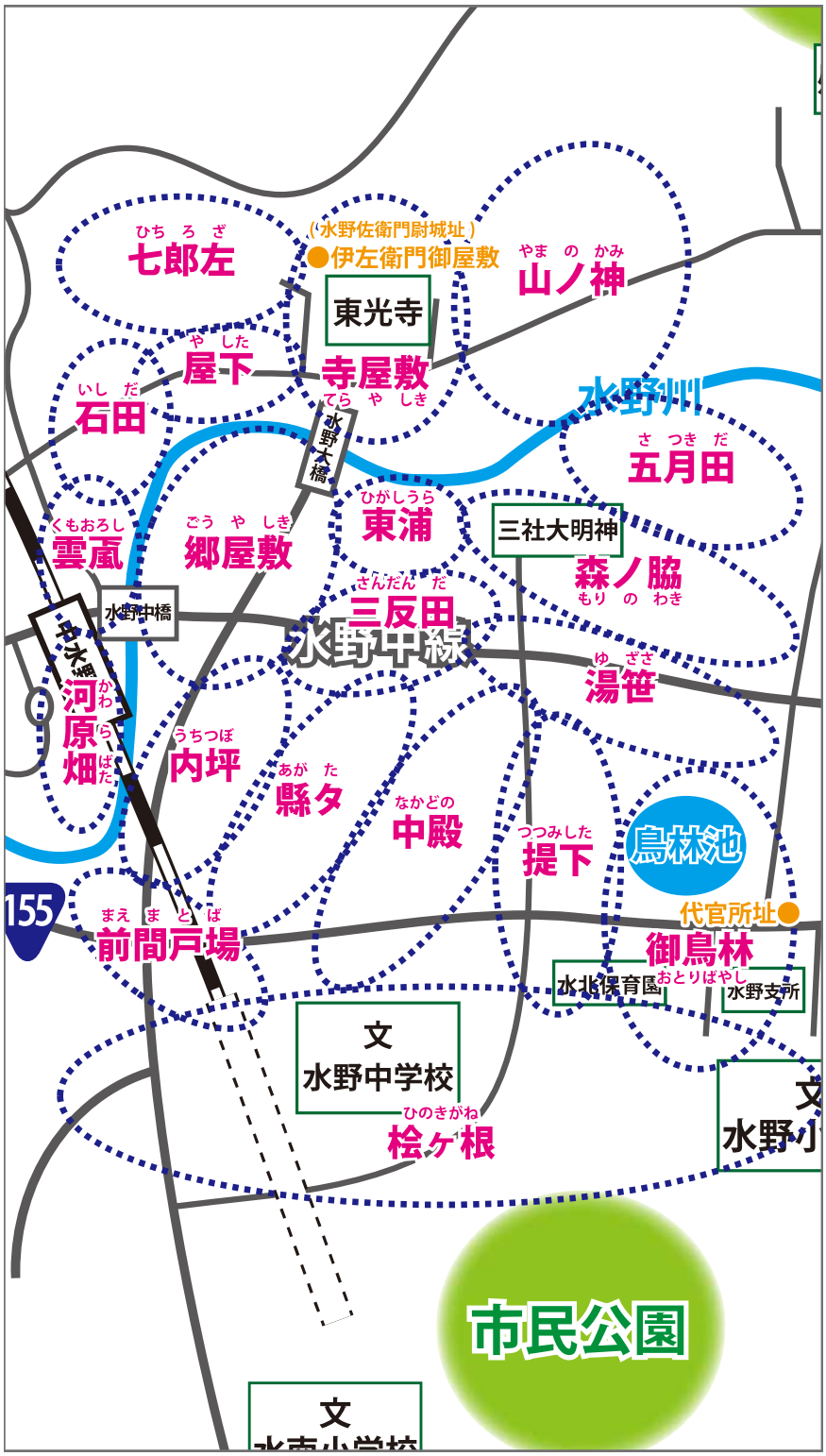
中水野地区の歴史・文化

現在では水野小学校の北側道路脇に代官所址碑があるのみですが、江戸時代中期の天明元年（1781 年）5 月 20 日に中水野村御鳥林へ「水野代官所」が設けられ、春日井郡 81 ヶ村、愛知郡 25 ヶ村、岐阜県可児郡 5 ヶ村の地方役所となり、広い地域を支配していました。代官所には司所（役所）や吟味所（警察）および官宅（代官屋敷）、興譲館（藩校）や武道場が設営され、地方行政の中心的役割をはたしていました。それより前の時代は、殿様街道筋の郷屋敷が中水野村の郷（中心地）となっていたようです。

森ノ脇には尾張戸神社の里宮として勧請された「三社大明神社」があります。水野川北岸の三沢町には七郎左という地名があり、応仁の乱後の西暦 1500 年前後に桜井七郎左衛門という豪農が住み、村のために尽くした篤志家と伝わっています。

寺屋敷には、七郎左衛門が永正元年 (1504 年) に京都丹波から雪心宗白和尚を招いて建立した禅宗（臨済宗）の「東光寺」があり、境内に美しい青竜の棟瓦を乗せた緑釉瓦の屋根を持つ薬師堂があります。

江戸時代に描かれた村絵図には寺屋敷に水野佐衛門尉城址」と表示された場所がありますが、地元では「伊左衛門御屋敷」と呼ばれています。ここは南北朝時代に活躍した水野平七（左衛門尉致国）という武将の居城跡ですが、幕末の頃に七郎左衛門の末裔の伊左衛門がこの城跡を利用して邸宅を築きました。



⑦ マルバタラヨウ

モチノキ科

天然記念物はハイブリッド！

中水野町１丁目（三社大明神社境内）

マルバタラヨウを発見したのは地元の植物研究家の日比野修さんです。

照葉樹林の権威である初島住彦鹿児島大学名誉教授は、1996年にこれをタラヨウとモチノキの雑種であるとして植物地理分類学会誌上に報告し、Ilex owariensis Hatsushima et M.Kobayashi という学名を与えました。

瀬戸市はその報告にもとづきマルバタラヨウを瀬戸市の天然記念物の第一号に指定し、保護と活用を図っています。

幹囲は 96cm。

マルバタラヨウ（瀬戸市指定天然記念物）

⑧ クワ

クワ科

養蚕の生き証人。

中水野のクワ

中水野町２丁目（水野川左岸堤防）

戦前、我が国の輸出を支えたのは生糸で、瀬戸市内でも広く養蚕業（ようさんぎょう）（カイコを飼ってその繭から生糸を作る産業）が営まれていました。

カイコの餌はクワの葉です。そのため水野川の両岸にはクワが植えられていました。昭和 14 年に水野地区を襲った洪水では水野川沿いの桑畑が全滅したり、石炭窯から排出される煤で葉が汚染されるなど苦労しましたが、生糸は戦後、ナイロンに市場を奪われ、桑の木は次々に伐採されました。ここに取り上げた木は水野川の左岸堤防上に残っているものです。根元から 3 本の幹を出していますが、幹のどこにも瘤（こぶ）が見当たらないので、栽培利用されていたものではなく、栽培されていたものの子孫と考えられます。最大の幹は 138cm。

⑨ アカヅガキ

カキノキ科

瀬戸市唯一のカキの品種。最後の１本。

アカヅガキ

三沢町１丁目（住宅地内の民家）

カキは中国原産の果樹です。わが国には古く渡来し、明治時代には国内でも 1000 ほどの品種が栽培されていました。江戸時代には渋を抜く技術が確立され、干し柿への加工、柿渋の搾取なども行われ、柿渋は防腐剤として年貢の代用にもされるほど利用価値が高いものでした。アカヅガキは「赤津柿」のことで、赤津村で見出された渋柿の品種です。

張州雑志に描かれた赤津の柿

「張州雑志（ちょうしゅうざつし）」には赤津村の産物として柿が描かれていますが、その形状からアカヅガキを描いたものと思われます。現在、瀬戸市内でこの一本だけです。

幹囲 109cm。

⑩ フモトミズナラ

ブナ科

DNA で分類変更、昔は「モンゴリナラ」

小田妻町２丁目
（瀬戸市民公園散策路）

フモトミズナラという種名については過去に大陸の「モンゴリナラ」と同一とする説が有力でした。近年、DNA に基づいて変更されましたが、多くの専門家から異論が出ています。

フモトミズナラ

フモトミズナラのどんぐり

痩せた土地に強い樹木で他の木々が進出する前に育ちます。葉はカシワに似ていますが、葉の質はやや薄く、カシワの香もありません。ドングリの先端がへこむのは特異です。近年のナラ枯れで最初に被害を受けたのがフモトミズナラですが、市民公園のような砂礫の土地では復活しつつあり、春にはエメラルドグリーンの若葉を見ることができます。

⑪ オオウラジロノキ

バラ科

渋い実は誰のために？

殿様街道のオオウラジロノキ

三沢町１丁目（殿様街道沿い）

オオウラジロノキはウラジロノキと同様に葉の裏が白く、梨を小さくしたような直径 3 センチメートルほどの果実をつけます。

写真ではナシやマメナシと比較しましたが、本当はリンゴの仲間です。山道に多数の果実を落としている様子をよく目にします。この木は単幹ではなく、三本の幹が撚り合わさるように育っていて、瀬戸の名木に指定された時はそれらをひとくくりにして計測し、幹囲 301cm とされています。

⑫ マメナシ

バラ科

絶滅のふちにある木。自生地の復活はなるか？

東松山町（水南小学校の校庭南）

名鉄瀬戸線の新瀬戸駅から 700m ほど北東に水南小学校があります。水南小学校の春の見どころは満開のマメナシです。マメナシはバラ科の樹木で、校庭のソメイヨシノと同時に咲きますが、より花が白いのがマメナシです。果実はその名の通りナシに似ていますが、直径は 1 センチメートル程度しかありません。校内には3本があり、そのうち１本が瀬戸の名木と天然記念物に指定されています。学校の周辺にも４本が点在します。

マメナシ観察会の熱心な活動により、これらのマメナシが保全されてきましたが、通学路拡張のため近くの一本が伐採されることになりました。マメナシは自分の花粉では種子ができません。残されたこの木に、今後、正常な種子ができるかどうか調査が必要でしょう。国レベルで絶滅危惧 IB 類 (EN)。

水南のマメナシ
（瀬戸市指定天然記念物）

III. 下水野編

下水野地区の歴史・文化

愛知環状鉄道の中水野駅周辺は縄文時代から近世までの複合遺跡となっており、出土した縄文時代の石器類が瀬戸蔵ミュージアムに展示されています。

江戸時代初期には内田町の内屋敷が下水野村の郷となっていたが、明和４年（1767 年）の大洪水で水野川が氾濫し、内屋敷の集落がすべて流失し、水野川南岸にある丘陵地の郷島に新たな集落ができて郷となりました。

内屋敷にあった「神明社」は、大正７年に荏坪の「八幡神社」へ合祀され、今は元宮跡に常夜灯２基があるのみです。合祀先の八幡神社の創建年代や勧請由来はわかりません。八幡神社の北段丘にある住宅地内に「荏坪古墳」があり、昔は海丸という修験者が古墳に居住していたことから「海丸の穴」とも呼ばれています。現在は荏坪古墳の入口が閉鎖されており、古墳内を見学することができませんが、羨道や玄室は原形のまゝ残っています。

十軒家集落の創設は、二代藩主 光友公が源敬公御廟の参詣途中で休憩する際に、周囲に民家がなく不便であったことから、内屋敷（郷）の農家 10 戸を移住させたことから始まっています。十軒町公会堂の前庭に建てられている「十軒家草創の碑」には集落ができた詳しい経緯が綴られています。

東谷山渓谷の川床にある「目鼻石」は、流水によって造形された甌穴（Pot.hole）という自然現象です。この岩石は人面に似た大変珍しい形をしており、瀬戸市文化財に登録されています。目鼻石の傍に「東門ノ滝」という麗滝もあったが今では水が涸れて滝の姿は見られません。

⑬ クロガネモチ

モチノキ科

穏やかな樹冠を見せる「市の木」

内田町１丁目
（愛環鉄道敷沿いの民家）

クロガネモチは 1969 年に瀬戸市制 40 周年記念行事の一つとして、市民投票により選定されました。

瀬戸市の「市の木」として各地に植栽されています。この木は民家の裏にあって樹齢 200 余年と見積もられています。雄株で赤い実はできませんが、遠方からでも美しい丸い樹冠を見ることができます。

下水野のクロガネモチ

⑭ イチョウ

イチョウ科

水野を見守り続けて 250 年

内田町２丁目（神明社跡地）、内田町１丁目（熊谷氏宅）

下水野のイチョウ

イチョウはわが国には自生せず、中国大陸から有史以前に伝来しました。水野のイチョウもすべて植栽されたもので、このイチョウはもともと下水野村の中心にあった神明社に植えられたものと思われます。明和年間の大洪水（1767 年）のときに唯一生き残ったとの言い伝えがあるそうで、それが事実だとすると樹齢はゆうに 250 年を超えることになります。胸高幹囲 309cm。

また、戦後、長野から入植した方が昭和 29 年と 40 年に植栽したものが内田町にあり、後者は 50 年余りのうちに胸高幹囲 3m 近くに育っています。

⑮ ソメイヨシノ

バラ科

明治以降の150年を彩ったサクラ。そろそろ交代？まだまだ元気？

内田町２丁目（水野浄化センター横の水野川沿い）、東横山町（愛環瀬戸市駅東）

ソメイヨシノは水野川の堤防に植栽され、春の水野を彩っています。

新瀬戸駅にはかつて瀬戸女学校があり、そこにも当時植栽されたソメイヨシノがあります。ソメイヨノは江戸時代に作出された品種で、エドヒガンとオオシマザクラの雑種といわれています。

わずか１本の木から接木や挿し木によって増殖が行われ、各地に広まりました。すべての株が同じ遺伝子をもちますので、同じ環境下では同時に咲き、花の色も同じです。近親交配を避ける性質があるため、たくさん植えてもさくらんぼはできません。

近年は衰えが目立ち、倒壊の危険を回避するために伐採されることもあります。伐採跡にふたたび桜を植えるとき、最近は地域の遺伝子を保護するために付近の山林から種子をとったエドヒガンやヤマザクラが用いられるようです。

下水野のソメイヨシノ

新瀬戸駅ナフコ前のソメイヨシノ

Ⅳ. 曽野・余床編

曽野・余床地区の歴史・文化

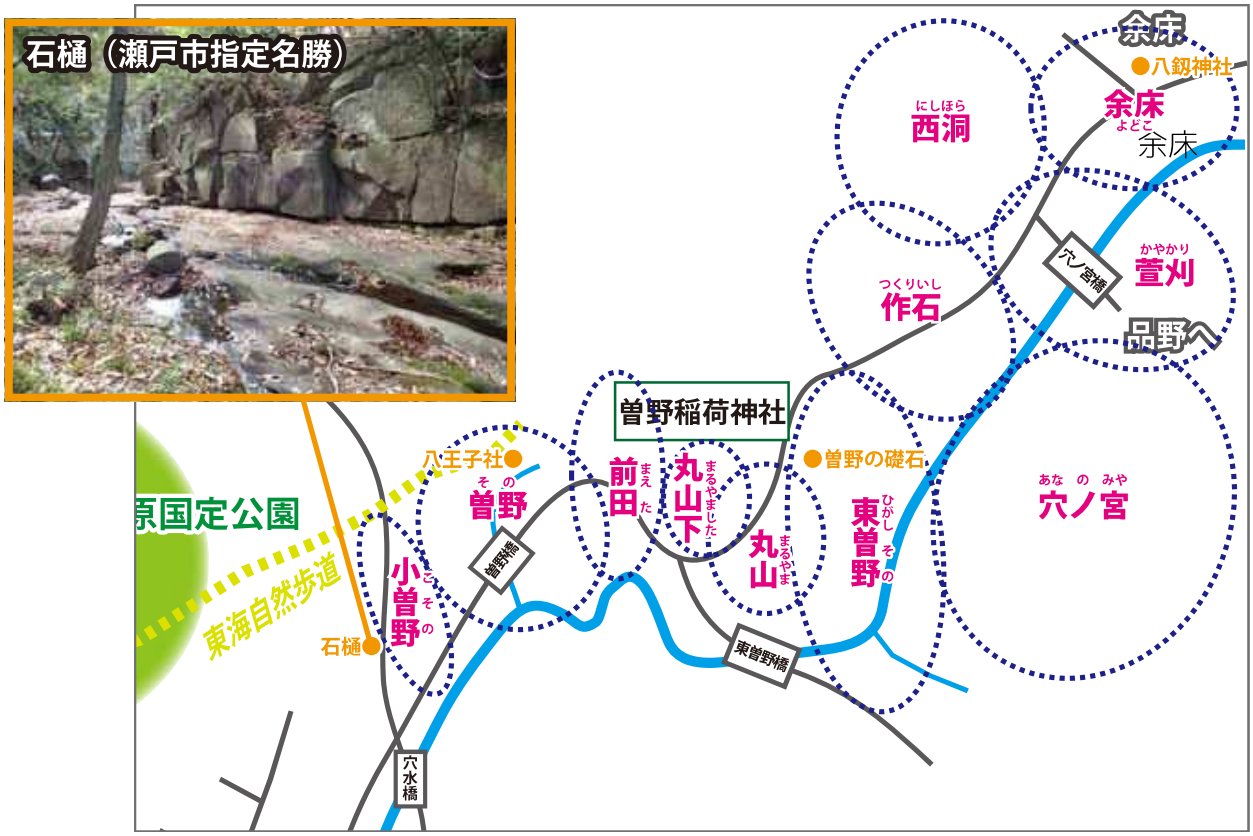
曽野町や余床町は上水野地区から離れた集落で、山間地特有の景観や植生が観られます。小曽野の樋ヶ沢川畔には市指定文化財に登録された名勝の「石樋」があります。川床の花崗岩の岩盤が、流水によって永い年月をかけて浸食された「方状節理」という現象ですが、流水部がまるで樋のように見えるので、石樋と名づけられています。

曽野稲荷神社は江戸後期の文化 14 年（1817 年）創建ですが、当初は村絵図にも載っていない小祠堂でした。昭和27年に神田耕造宮司が常在司祭となったのを機会に曽野稲荷奉賛会が設立されて、水野地域はもとより瀬戸近郷から名古屋市まで氏子が広がって、境内整備も進み、正月の初詣や初午には人出で賑うようになりました。

山法師山の麓にある「八王子社」の創建年代はわかりませんが、天明７年（1787 年）に東曽野の権成寺が廃絶したときに毘沙門堂を八王子社へ移したという記録が残っています。

東曽野の水田の中に、２㍍四方で、中央に 60 ㎝程の丸い穴がくり抜かれた加工石がひっそりと埋まっています。石の由来は何も伝えられておらず「作石」と呼ばれ謎に包まれた存在でしたが、考古学者の研究で白鳳時代（７世紀）に加工された仏教寺院の五重塔等の心柱を支える礎石であることが解明されました。

江戸時代には余床に 20 余戸の民家が存在していたと記録されているが、現在では 10 世帯以下に減少しています。集落の北奥に日本武尊を祭る「八釼神社」があるが、創建年代や勧請由来はわかりません。



⑯ カタクリ

ユリ科

水野の秘境で夏には休眠する美花。

曽野町（山水ラボラトリー西）

曽野にはカタクリがサクラと同じころに紫色の花をいっせいに咲かせる一角があります。カタクリはスプリング・エフェメラル（春の妖精）と呼ばれる生態をもつ植物で、その仲間は早春に葉を広げ、陽光をあびて光合成を行い、急いで花を咲かせます。樹木の若葉が展開する 5 月には結実して葉も枯らして休眠に入ります。

観察のご希望はせとまるっと環境クラブ（事務局瀬戸市環境課）へ

曽野のカタクリ

⑰ サクラバハンノキ

カバノキ科

実は邪魔者かも？希少種の二律背反。

曽野町（曽野稲荷社北参道沿い） 全国的には分布が限られている樹木で、環境省は準絶滅危惧（NT）としていますが、瀬戸市内では沢筋や湿地でふつうに見ることができます。

曽野のサクラバハンノキ

落葉高木（らくようこうぼく）で冬のあいだに赤い房状の雄花を枝先から下げます。湿地では根が過湿の土中にあるため、呼吸を行う気中根を多数発生させます。池のへりや土砂で埋まるなどした砂防ダムに最初に侵入します。幹囲 1 メートル、樹高 10 メートルを超える株が高密度で湿地を占有するためシデコブシの衰退の一因との見方もできます。

⑱ ダイオウマツ
（またはダイオウショウ　マツ科）

ふるさとはアメリカ。
大きなマツボックリがうれしい。

曽野町（稲荷神社境内）

曽野稲荷のダイオウマツ

名古屋城の天守を復元するために岩手県のアカマツが用いられることになったそうです。その４００年という樹齢もさることながら、建築物に利用されるほど通直な幹をもつことにも驚かされます。この地方のアカマツは幹が曲り、大木になる前に枯死するからです。かつてその欠点を克服する樹木が海外に求められ、北米産のテーダマツ、ストローブマツ、ダイオウマツなどが試験的に導入されました。成長が早く、幹がまっすぐで、マツクイムシにも強いため、曽野町、鹿乗町、穴田町など各所で大木に育っています。

なかでもダイオウマツは長径 20cm に及ぶマツボックリや 30cm を超えるような長い葉が個性的で、いけばなに用いられることも。近年は外来種問題などで植えられることがなくなり、利用もされていませんが、ひとつの時代の要請を体現した樹木です。

幹囲は 199cm。

江戸時代末期には瀬戸市内の山は植生がないか、マツばかりでしたが、いまやすっかり様変わりして、広葉樹の森にかわっています。

尾張名所図会

V. 鹿乗・川平編

鹿乗・川平地区の歴史・文化

「鹿乗」という町名は、尾張氏祖神の天香語山命が高座山へ降臨したときに、一匹の白鹿が現れて命をその背に乗せて玉野川を渡り、東谷山へ遷ったという故事由来に因んで、昭和 39 年にネーミングされました。

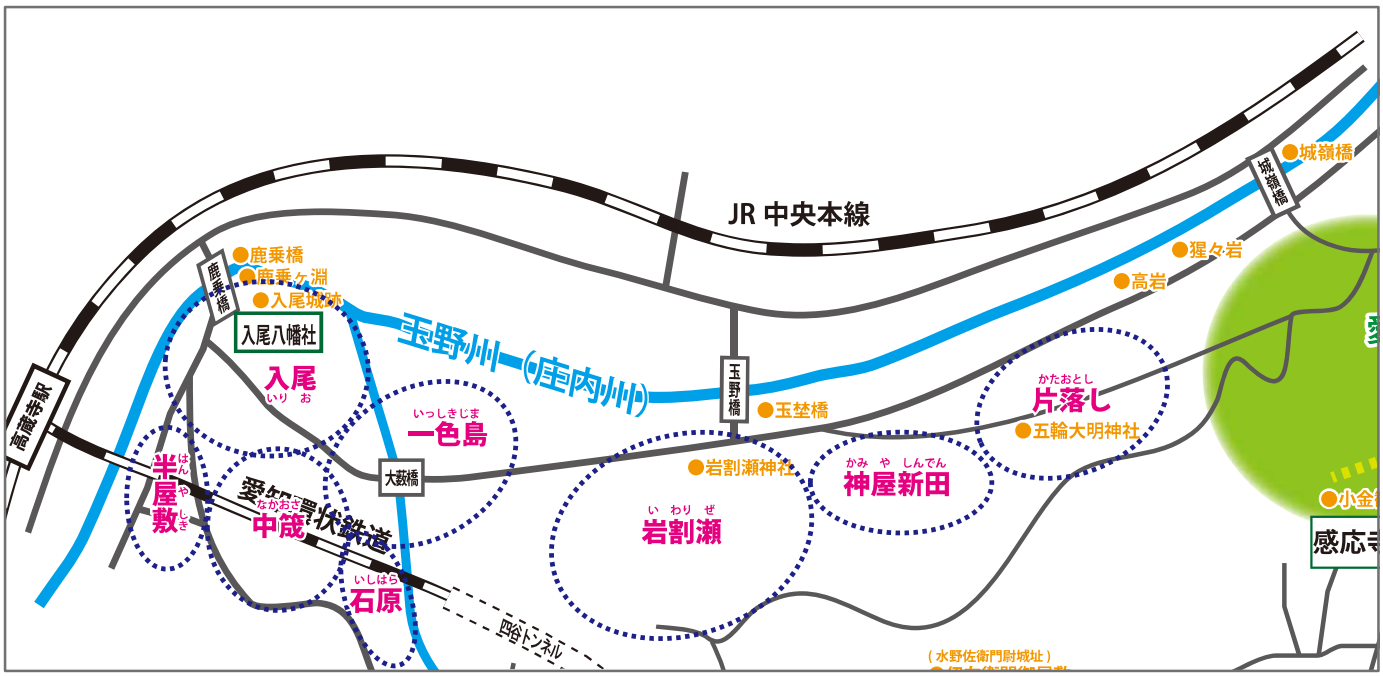
明治 43 年に架けられた鹿乗橋はスチールアーチ橋という珍しい構造ですが、橋下は景勝地の「鹿乗ヶ淵」となっており、尾張名所図会には「太鼓岩」「長持岩」「獅子岩」など多数の岩が描かれています。

平安時代の末頃に、京の都から平景貞という武者が入尾へ来て城を築いて住み着き、水野太平太と名乗り、この人物が全国の水野氏の祖先とも言われています。入尾城は庄内川南岸に築かれたと伝わり、城跡には入尾八幡社が祭られています。

岩割瀬は狭い土地ですが、昔は数軒の民家が点在していたものの過疎化が進み、今は２～３軒となりました。昔は対岸の玉野村へ行くには、ここで川渡りしていたが、橋がなく岩を割って川中に投げ込んで、飛び石にして川を渡ったという地名伝承があります。県道 15 号線に沿った急峻な崖上に須佐之男命を祭る「岩割瀬神社」があり、県道から外れた旧道沿いにある「五輪大明神社」の御神体は道祖神（男根）です。

川平町の大半は北部山地の森林地帯で、民家は県道 15 号線に沿って４～５軒のみです。ここは宝暦７年（1757 年）に中水野村から家を移して創設された片落集落です。

定光寺町の城嶺橋から鹿乗橋に到る庄内川は、別名を「玉の川」と称して国定公園に指定されています。城嶺橋から岩割瀬に到る川床や川岸には高岩や猩々岩をはじめ、数多くの奇岩怪石がある景勝地で、尾張名所図会にもその景色が描かれています。



⑲ アツミダイダイゴケ

地衣類

これが血痕？　先人の観察眼に脱帽！

川平町（玉の川の猩々岩上）

「尾張名所図会」では庄内川の左岸崖の上に天狗岩という岩が描かれています。その昔、天狗に戦いを挑んだのが猩々（空想の生物）です。しかし刀で斬られ、血はあたりに飛び散りました。その血が付いた岩が「猩々岩」です。

現地で実見してみると付着しているのは血液ではなくアツミダイダイゴケという地衣類です。専門家は「暖温帯の岩上に成育する稀種」としています。

川平町の猩猩岩のアツミダイダイゴケ

⑳ アベマキ

ブナ科

**カブト、クワガタはいるか？
どんぐりの木。**

鹿乗のアベマキ

鹿乗町（八幡神社境内）

かつて入尾城があったとされる場所はいま八幡社になっています。鳥居をくぐって境内にはいるとまず目に飛び込んでくるのが社殿にむかって右にそびえているアベマキの大木です。幹囲 284cm。根回り 540cm。

説明看板には「水野名木ものがたり」として「瀬戸市内では根回り一番」「夏には樹液にカブトムシやクワガタが集まり・・・」と書かれています。

多くの図鑑ではカブトムシはクヌギの樹液などに集まると紹介されていますが、水野にクヌギは自生していません。クヌギに代わってカブトムシに餌場を提供しているのがこのアベマキです。樹液の甘い香りがするときはスズメバチに注意しながら探してみましょう。

Ⅵ.東谷山編

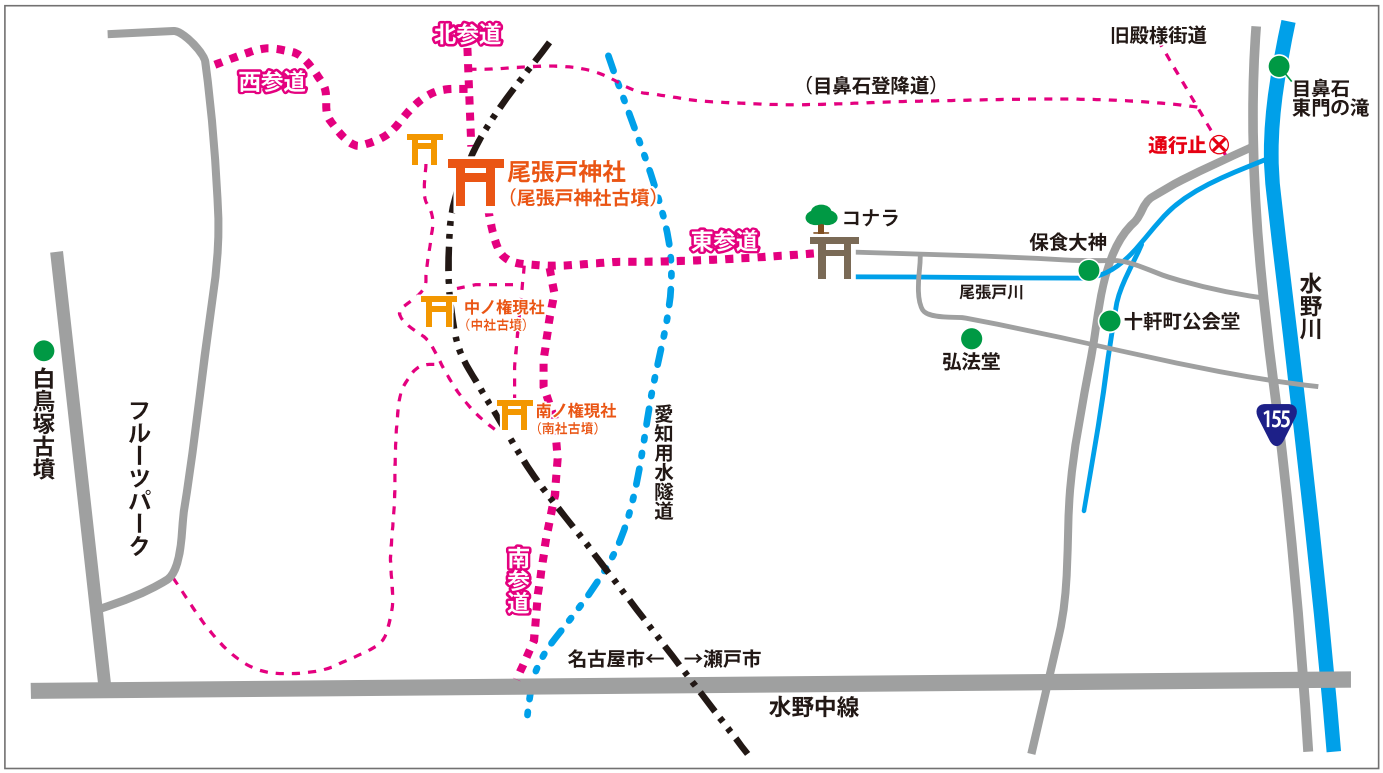
東谷山の歴史・文化

水野地域の西端にある東谷山は、名古屋市と瀬戸市に跨っており、標高 198.3mの山で、昔は「當国山」と書きました。水野方面から眺めると低い山脈(やまな)みですが、志段味方面から眺めるとひときわ高く聳えて見えます。

東谷山の山頂は４世紀前半頃に建造された古墳となっているが、この古墳の墳丘を開削して建てられているのが「尾張戸神社」です。この他に東谷山の尾根伝いに２つの古墳があり、それぞれの墳丘には、中ノ権現社と南ノ権現社という祠(ほこら)が建てられています。東谷山の尾根筋にある３つの古墳（尾張戸神社・中社・南社）は、平成 26 年 10 月に名古屋市側の上志段味にある白鳥塚古墳、志段味大塚古墳、勝手塚古墳、東谷山白鳥古墳とともに「志段味古墳群」の名称で国史跡に指定され、「歴史の里」としての整備が進められています。

尾張戸神社は、平安時代の「延喜式神祇巻(えんぎしきじんぎかん)」という古典書籍に載せられた式内社(しきないしゃ)という由緒ある古い神社で、東谷山を拠所にこの地域を支配していたと伝わる「尾張氏(おわりうじ)」という豪族の祖神(おやがみ)（天火明命(あまのほあかりのみこと)、天香語山命(あまのかぐやまのみこと)、建稲種命(たていなだねのみこと)）が祭神となっています。尾張戸神社へ参拝する道は東西南北の４筋があり、景勝地「目鼻石」を眺めた「御賞覧場」から登る道もありました。東谷山の西側段丘には東谷山フルーツパークが造成され、そこから直接の登る道も造られました。

尾張戸神社神殿



㉑ トウカイコモウセンゴケ

モウセンゴケ科

虫食う植物、でもお花はかわいい！

尾張戸神社南参道沿い

東谷山の南面はかつてシデコブシの群生する湿地でしたが、近年は樹林に埋没した格好で、シデコブシはめっきり数が減りました。それでも耕地との境の林縁には湿地の名残があり、要所要所でアリノトウグサやヤマイなどが見られ、トウカイコモウセンゴケは初夏にピンク色の可愛い花を見せてくれます。トウカイコモウセンゴケは葉に粘液を分泌し、昆虫を捕えて消化吸収する食虫植物です。モウセンゴケとコモウセンゴケとの雑種起源であることが分かっています。

トウカイコモウセンゴケの花

㉒ トウゴクシダ

オシダ科

東谷山で見出された、その名も東谷シダ。

東谷山の名をもつトウゴクシダ

尾張戸神社東参道鳥居周辺

シダのなかでは比較的ありふれた種ですが、あまりなじみがない植物かもしれません。

トウゴクシダは、東谷山で採取されたものが基準標本になっています。そのためトウゴクシダは「東国シダ」ではなく、「東谷シダ」を意味します。よく似たベニシダとは最下羽片の小葉が短くならないことで見分けられます。

ベニシダ

VII. 定光寺自然休養林編

定光寺自然休養林の歴史・文化

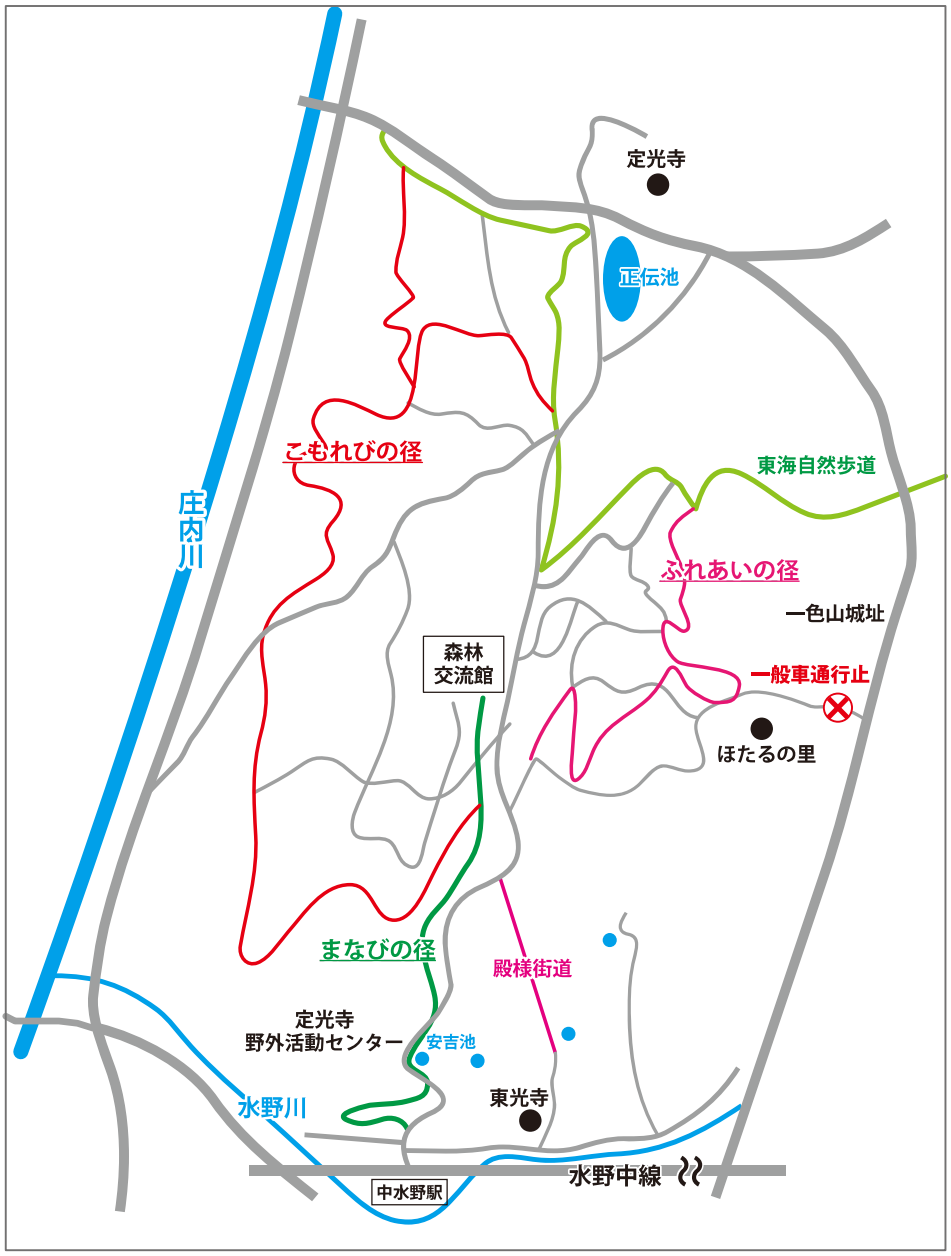
水野盆地から庄内川や応夢山にかけて広がる森林地帯の大半は国有林（約 700 ㌶）で、林野庁中部森林管理局が管理しています。この森林地帯の自然を活かして、観光リクリエーションの場として「定光寺自然休養林」が昭和 44 年に整備されて一般開放されました。

自然休養林内には尾張徳川家が源敬公御廟を参詣するときに利用した「殿様街道」が通っており、昭和 47 年に自然休養林内の「東海自然歩道」が開通し、林野庁中部森林管理局の手で「ふれあいの径」「まなびの径」「こもれびの径」という散策路も造られました。

丸根山の山頂にある自然休養林の大駐車場の西側に森林交流館が建っており、ここからの眺めは「玉の川」の対岸にある高座山や高蔵寺ニュータウンが一望にでき、尾張徇行記には丸根山の山頂を「横笛峠」と称する絶景地である紹介されています。

自然休養林東端にある一色山の山頂には中世城郭の「一色山城址」があり、一色山の麓には宝暦９年（1759 年）に稲込（いなごめ）集落が創設され、太平洋戦争後まで民家があったが現在は住民が転出して廃郷となり、集落跡地を利用して「定光寺ほたるの里」が運営されています。

自然休養林には森林交流館のほか、愛知県労働者研修センター、定光寺野外活動センター（昭和 60 年開設）、中小企業大学校瀬戸校（平成元年開設）、キャンプ場、アーチュリー場など数多くの保養施設が造営されたが、野外活動センターと中小企業大学校以外は閉鎖されました。



㉓ ヒトツバタゴ

モクセイ科

「なんじゃもんじゃ」はこれじゃ。

定光寺野外学習センター内

江戸時代に樹種の分からない木として「なんじゃもんじゃ」と呼ばれたことがあります。現在でも数は少なく、国のレッドデータブックでは絶滅危惧II(VU) と判定されています。この樹木が自生するのはおもに朝鮮半島で、ついで国内の株の大半が長崎県の対馬（つしま）に分布します。

移植されたヒトツバタゴ

本土では、対馬から離れて中部地方に全体でも 100 株程度が自生しています。このような分布は隔離分布と言われ、かつて日本列島がアジア大陸と陸続きであった証拠とされています。そのため各地で天然記念物に指定されています。この木はかって内田町にあったものを当地に移植しました。幹囲 64cm。

㉔ シデコブシ

モクレン科

水野でも自生地が半減。深刻な危機。

自然休養林内のシデコブシ

まなびの径沿い

シデコブシは東海地方にのみ自生するモクレン科の樹木です。春に桜とほぼ同時に薄ピンク色の花を咲かせ、その後、葉を展開します。

自生地が限られていることと、他の樹木の生長によって日当たりが悪くなって枯死することが多いため、国のレッドデータブックでは準絶滅危惧 (NT) とされています。

㉕ アラカシ

ブナ科

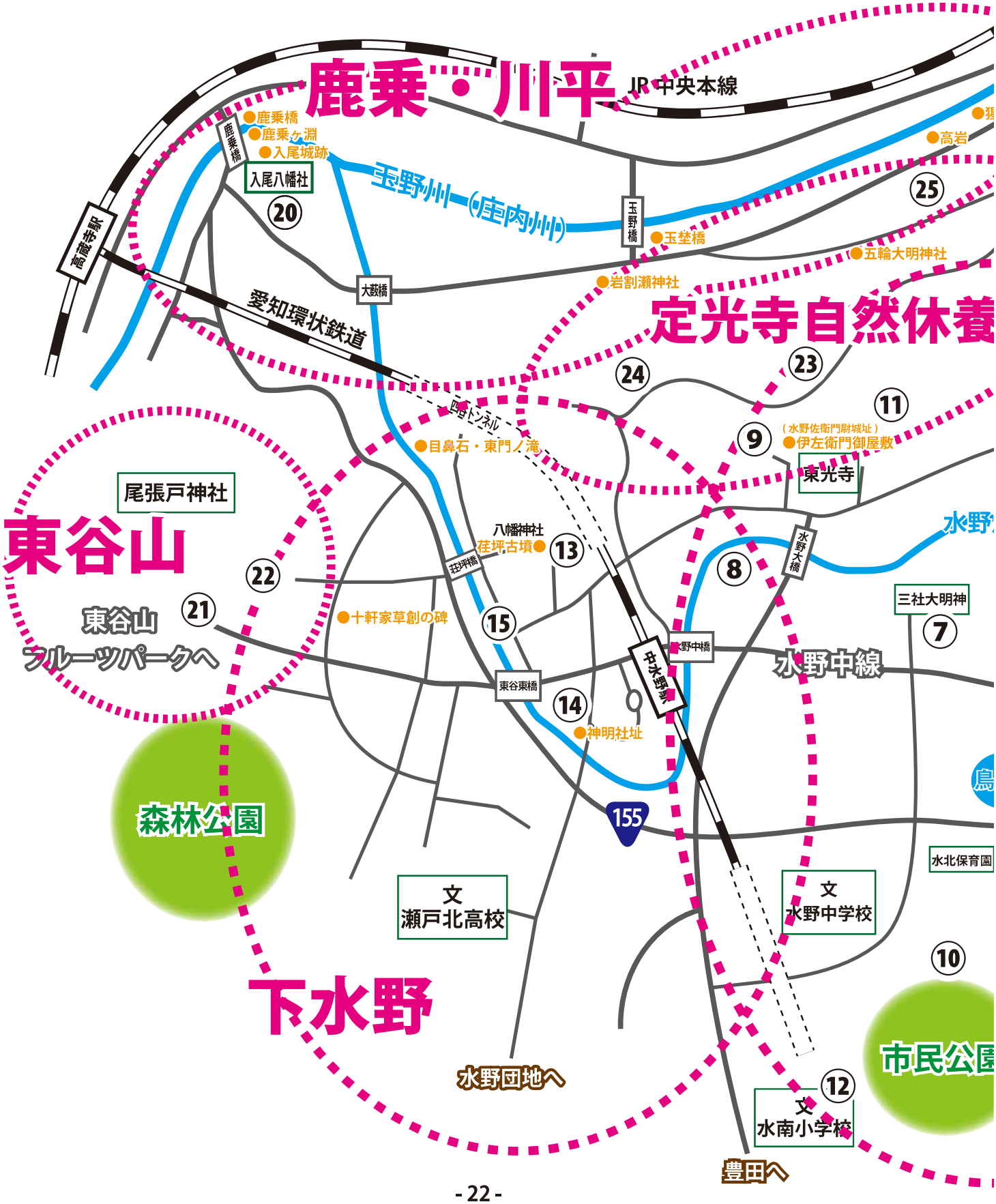
アラカシの常識を超えた大木。

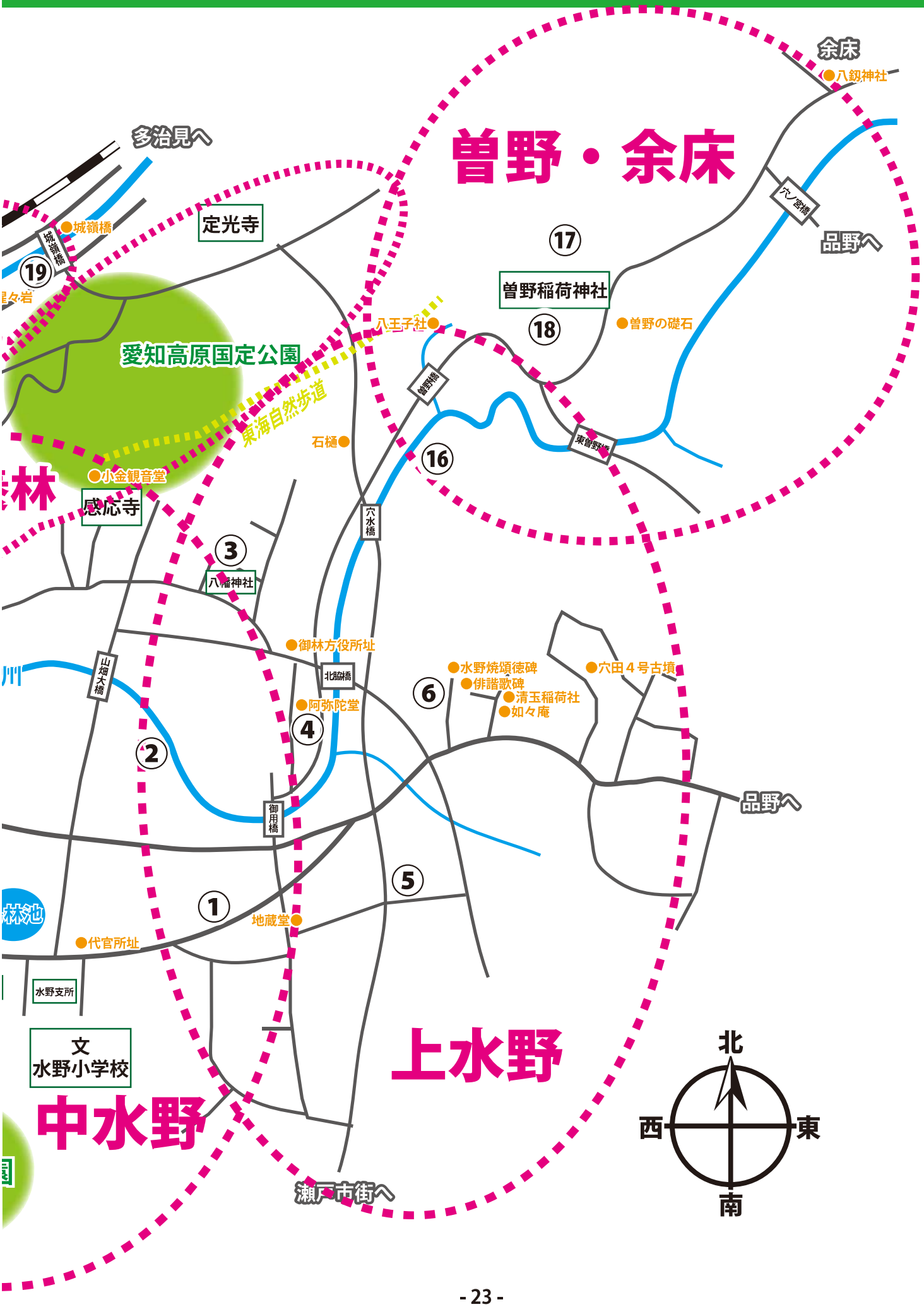
こもれびの径沿い

　アラカシはブナ科に属していて瀬戸市内に無数に自生しています。コナラ、アベマキなどの森林は徐々にシイ、カシの森に変わるとされていますので、水野の森はこれからアラカシが主役を担うかもしれません。写真の木は瀬戸の名木に指定されたものですが、根元がドーム状に盛り上がっているのが大きな特徴です。樹木医の尾関宗弘氏は細菌の一種がひきおこす根頭がんしゅ病の疑いがあるとしています。この木より幹周が大きなアラカシも周囲に多数ありますが、多くは枯損が著しく、アラカシはあまり寿命が長くないことを暗示するようです。幹囲は 170cm。

川平町のアラカシ

水野地域散策マップ


鹿乗・川平
JR中央本線
鹿乗橋
●鹿乗橋
●鹿乗ケ淵
●入尾城跡
入尾八幡社
⑳
玉野川（庄内川）
玉野橋
●玉埜橋
●高岩
㉕
●五輪大明神社
●岩割瀬神社
高蔵寺駅
大薮橋
愛知環状鉄道
定光寺自然休養
㉔
㉓
⑪
西目トンネル
●目鼻石・東門ノ滝
⑨
（水野佐衛門尉城址）
●伊左衛門御屋敷
東光寺
尾張戸神社
東谷山
八幡神社
荏坪古墳●
⑬
荏坪橋
水野大橋
水野
⑧
㉒
㉑
東谷山
フルーツパークへ
●十軒家草創の碑
⑮
三社大明神
⑦
水野中橋
水野中線
東谷東橋
⑭
中水野駅
●神明社址
森林公園
155
鳥
水北保育園
文
瀬戸北高校
文
水野中学校
⑩
下水野
市民公園
水野団地へ
⑫
文
水南小学校
豊田へ


曽野・余床
上水野
中水野
余床
八釼神社
多治見へ
品野へ
品野へ
瀬戸市街へ
定光寺
城嶺橋
城嶺橋
愛知高原国定公園
東海自然歩道
小金観音堂
感応寺
八王子社
曽野稲荷神社
曽野の礎石
曽野橋
東曽野橋
穴ノ宮橋
穴水橋
石樋
八幡神社
御林方役所址
北脇橋
阿弥陀堂
山畑大橋
御用橋
水野焼頃徳碑
俳諧歌碑
清玉稲荷社
如々庵
穴田４号古墳
地蔵堂
代官所址
水野支所
文
水野小学校
北
西
東
南

水野の自然に触れて

まほろばの地、水野は、比較的温暖な気候と豊かな自然に恵まれていますが、水野に暮らしていても、日々の忙しさにまぎれ、季節の移り変わりとともに姿を変える木や花を目に留めることも忘れがちです。

私たちを取り巻く「自然」が、すべて、遠い時代から受け継いてきた大切な財産であることを、今回の水野まつりの３０周年記念の特別版で水野の自然を取り上げて頂き、「自然の大切さ」の思いを一層深めることとなりました。

特に、冊子のなかでも紹介されていますが、瀬戸市の天然記念物と指定されているマルバタラヨウ（三社大明神社境内）や万葉集に「堅香子の花」と詠まれ親しまれた早春の花のカタクリは、地域の方々のご協力を頂きながら保全して次世代へ継承することの大切さを痛感しました。

また、冊子の中で紹介されている他の樹木につきましても、地域の暮らしや四季を通して時を重ね、そこに住む人との繋がりを持ちながら静かに息づいています。

今回の記念誌を手に持って、水野に住まれる方はもちろんのこと、多くの方々が、水野の自然に季節ごとに触れて頂きたく、紹介している木や花を散策する中で、新たな感動を覚えて頂けたらと思っております。

おわりに、本冊子発行にあたり、調査から執筆まで快くお受け頂いた上杉様と２５周年の記念冊子に引き続き今回も執筆編集をして頂いた松本様、中野様には深く感謝しお礼申し上げます。

水野まつり 30 周年特別実行委員会
会長　　林　　春　治

参考文献

植物分類表　大場秀章編著　2009、環境省レッドリスト 2018、瀬戸市の植物　2012　愛知県植物誌調査会、中部の地衣類Ⅲ　尾張北～東部　2018　山本好和ほか、瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 XIV 1997　瀬戸市歴史民俗資料館、あいちの名木　1992　愛知県緑化推進委員会、瀬戸の名木 1997　瀬戸市教育委員会、尾三濃境界地方の植物　加藤秀次郎　1976、瀬戸市史（通史編上下　資料編Ⅰ～Ⅳ　自然編）、張州雑志、尾張名所図会、瀬戸市民俗調査報告書二（水野・掛川地区）　瀬戸市史編纂委員会　2002

The Journal of Japanese Botany Vol. 90 No. 2 137 J. Jpn. Bot. 90: 137–140 (2015) 村松正雄：岐阜県にマメナシとアイナシ（バラ科）の自生を確認

尾張徇行記、張州府志、尾張志、水野史年表、梶田義賢著 . 水野のあゆみ、中尾眞著 . 水野の地名あれこれ、山川一年著 . 水野の石造文化・石は語る、柴田鐘三著 . 碑、鈴木三樹著 . 水野探訪・殿様街道

水野まつり 30 周年特別実行委員会名簿

名誉顧問	島倉　誠	冨田宗一	池田信子
顧問	加藤釟男		
相談役	日比野平生		
会長	林　春治		
副会長	加藤繁紀	中尾文人	
委員長	鈴木勝也		
副委員長	杉山　功	加納健次	鵜飼弘富
事務局長	磯村　晶		
会計	加藤礼子	加藤眞也	
書記	加藤砂都子		
委員	山田晋也	熊谷吉仁	大島隆司
	三浦栄作	加藤　進	小川慎二
	松本博司	中野克己	上杉　毅
	三浦みほ子	加納孝子	作石さよ子
	梶田照代		

水野の自然

水野っていいね！

令和元年 5 月 3 日発行（非売品）
著者　上杉　毅
　　松本博司
監修　中野克己
発行者　水野まつり 30 周年特別実行委員会
　　会長　林　春治

水野って
いいいね！

水野まつり
30 周年特別実行委員会
2019.5

助成　（公財）瀬戸信用金庫地域振興協力基金